

○奥田都子* 岡田照子** 三輪聖子** (*共立女大,**岐阜女子大学)

【目的】 『白河家政録』は、「寛政の改革」で知られる松平定信が、白河藩主となった1783年に記したものである。本書は、国書総目録などをあたる限り、「家政」の文字を書名にもつ初期の文献と考えられるうえ、江戸期において「家政」の語が用いられる希少な例でもあり、「家政」の用語と概念についての歴史的究明を進めていくうえで、重要な基礎資料であるといえる。しかしながら、これまで本書は「家政学文献集成」などにも採り上げられず、活字化されていなかったこともあって、家政学の視点からの考察はほとんどなされていない。そこで、本研究では『白河家政録』の内容と特質を明らかにするとともに、書名の「家政」の意味するところを検討し、本書に示される江戸期の「家政」概念を、近代以降の「家政」概念との比較のもとに考察することを目的とする。

【方法】 松平定信著『白河家政録』を整理要約し、執筆意図・背景と全体の内容を明らかにするとともに、内容構成と領域についての検討を行った。主資料としては、岡田照子による「翻刻 白河家政録」(岐阜女子大学紀要26号 1997)を用い、内容理解のための補助資料として、定信の他の著作『宇下人言』『修行録』を参考とした。

【結果】 『白河家政録』は、藩政改革に際して家臣の職務心得の書として著されたが、その内容領域は修身・政治・経済・教育・冠婚葬祭などの広範にわたり、書名の「家政」は、「領主一家の家庭管理」や「家臣及び家族の生活の管理」を含む「領国の管理経営」全般を意味するものと解される。この内容領域から、近代以前の「家政」概念が、家庭生活領域を越える広範な概念であったことを明らかにする実例が得られ、「家政」概念の変遷をたどるうえで重要な手掛かりが得られた。